

尼崎北中タリークラブ 新会員オリエンテーション資料

中タリーに関する

十四の断章

松井幸雄

資料提供 山岡宗一郎会員

まえがき

一九七〇年九月私は網走における第三五〇地区大会においてガバナーノミニの指名を受けました。が年来不勉強の私は何から手がけてよいやら全く途方にくれた次第でした。この時ある先輩から干種会という真面目なロータリーの研究会があるが行ってみたらとの誘いを受けました。早速小堀憲助先生の主宰する干種会の門をたたき第一期生として入門させていただきました。北海道から東京へ勉強に通いましたがこれは私にとって正に地獄で仏に出会ったようなものでありましてその一年がどれ程私に役立つたかはかり知れないものがあり、これによってガバナーとしての自信も少しながら持つようになったのであります。

十四の断章は小堀先生の講義をそのまま私なりに要約したものであり参考文献も全部小堀先生の著書によるものであります。これを先生の監修とお許しを得て任期中一四回発行するガバナーズレターの付録として三五〇地区の会長・幹事さんに配布したものであります。幸いにしのご好評を得たことは喜びにたえません。

干種会も各地で催される毎に好反響を呼び起し、殆ど全国各地に支部が結成せられ著名なロータリーの方々のご賛同を得ておりますことは誠に同慶にたえない次第です。

私達の住む北海道でも是非小堀先生の警咳に接する機会を作るべく努力したいと念願しております。

昭和四十八年七月

松井幸雄

目次

まえがき	1
第一章 序章	5
第二章 ロータークラブとは	7
第三章 他の奉仕クラブとは	10
第四章 国際ロータリーとは	12
第五章 ローターの綱領とは	15
第六章 二つのロータリー標語とは	17
第七章 ローターの職業倫理訓とは	20
第八章 四つのテストとは	23
第九章 クラブ奉仕とは	25
第十章 職業奉仕とは	28
第十一章 社会奉仕とは	31
第十二章 青少年奉仕とは	33
第十三章 国際奉仕とは	36
第十四章 ローターとは	38
付録	41

第一章 序章

今から五年ほど前のことです。国際ロータリーは、全世界のロータリークラブに対して、ロータリー情報の周知徹底が急務の仕事と考え、《ディストリクト・リーダーシップ・フォーラム》*district leadership forum* と呼ばれる一日講習会の制度を設けました。これは国際ロータリー理事会がロータリー情報についての指導者を養成し、この指導者が各クラブの一定の役員を招いて行なった講習会でありました。不幸にして、この講習会は予算の関係で二年だけでとりやめになってしまいました。この講習会の指導者をつとめたパスト・ガバナー神野太郎、白山源三郎、神守源一郎等々といった方々の報告書が現在においても優れたロータリー理論の解説として高く評価されている事実を見ますと、この種の努力は現在でも必要なことではなからうかと思われるのであります。

で皆様は、この第三〇地区の、各地域社会の代表的職業人と致しまして、ロータリークラブに御入会になられロータリーとは一体何のことであるか御存知なのでしょうか。日本においては、戦前のロータリークラブの会員選考の厳格さからして、いづれも、日本全体を代表するような大実業家でないければロータリークラブの会員にはなれませんでした。ですから、戦前のロータリアンはその実行力の裏付けにおいて、高い識見をもち、その高い識見の立場から、国際ロータリーの奉仕理論の追求にも、東洋倫理と西洋哲学とを結びつけようとしたところがあります。日満ロータリー連合会のような独立した組織を作ろうとしたとき、ロータリー哲学と国際ロータリーの基本方針から逸脱するといふ行きすぎなどはありましたが、しかし、その高邁な精神力とあふれるばかりのロータリー精神に対する情熱は高く評価されてよいと思われるのであります。

これに対して、戦後のロータリアンは諸先輩の情熱に匹敵するものをおもちでありましょうか。私は皆様の一人一人が、決して諸先輩に対して、人生を生き抜く情熱とその知性において、決して劣るものがあるとは思えません。この全世界の人々が驚嘆の眼をもって眺めている経済の発展を御覧いた

だきたい。われわれの一人一人が、いかに小さな齒車たりといえ、その一翼を荷なっているという事実に着目するとき、われわれのもつ精神力が戦前の経済人のそれに劣るものを見出すことは、およそ困難なことだと思ふのであります。しかし、事柄をロータリーの世界に限ってみましょう。そう致しますと、戦前のロータリアンと戦後のロータリアンとの間に顕著な相違が見出されます。戦前にあつては、大実業家たるロータリアンは、ロータリーの何たるやを見つめ、そして、それによって得たものを自己の企業上の生活、家庭生活、社会生活の基礎としたという重要な事実があります。つまり、ロータリークラブ活動によって得たものを自己の新たな人生観として受けとめ、その原理に従つて行動しようとしたのでありまして、彼等の行動が時に利あらず、軍閥の弾圧によって、昭和一五年に潰え去つたことは、日本国の運命とともに、かえすがえす残念なことであつたのであります。

このことは単に日本のロータリアンについてのみ言えることではありません。事柄を全世界的にみて、ロータリー運動が地球のすみずみまで発展して行くことは、ロータリーの説こうとする《小さな善意》と、それを通じての《人類の和睦》と、《恒久的繁栄》の達成から言つて、まことに目出たいことといわなければなりません。残念ながら一部の国々においては、ロータリーの本質は努力なくして会得されるものではないという事実が看過され、いたずらな親睦と空虚な社交と虚飾の奉仕に終始し、ロータリーをもつて、《エリートシンボル》とのみ考えようとする人々が意外と多いのであります。

地域社会の代表的職業人によつて構成されている皆様ロータリアンに、どうかロータリーのもつ功德について真面目にお考えいただきたい。そしてお考えいただく一つのタタキ台として、私は、ロータリーの功德に関する原理的解説を試みることに致しました。もちろん、ここに綴られたものの中に誤解があるかも知れませんが、その時は遠慮なくこれを御叱正下さい。私はそれを謙虚に受けとめ、私のロータリー探究の一つの糧に致したいと思ひます。

ただ一点皆様に申し上げたい。それは企業経営とは何か、それは利己か、利他か。そういう反省を

なさらない方はおられますか。およそ生きとし生けるもの、この世に生れてから、自己に対し、自己の周囲の人たちに対し、そして全人類に対して、一定の責任を感じ、その責任を果す努力によって自分のかけがえのない人生を意義あらしめようとしない人は少ないと思います。

幸か不幸か、私達は人間であって神ではない。故に時に過ちを犯すこともあり、時の力によって動かされることもある。この千差万別な人生模様においていずれの人とて自己及び他人の幸せを望まない人はあるでしょうか。実はこのところがロータリー哲学の基本に横たわっている点なのであります。この《ロータリーの功徳》を理論的に皆様と一緒に考えることが、これからのロータリー運動の推進のためにどうしても必要だと思つたのです。

第二章 ロータリークラブとは

ロータリークラブとは、一体どういう特色をもったクラブのことをいうのでありましょうか。その間に答えるためには、ロータリークラブの歴史をふり返り、そして、それを他の類似のクラブ理論と比較してみるとよいと思います。

御存知のようにロータリークラブは一九〇五年(明治三八年)二月二三日にシカゴの青年弁護士ポール・ハリスが創つたクラブです。創立当初において、ポールの目的としたところは二つありました。一つは現代都市生活から生ずる企業経営者の孤独感から逃れようとするものであります。企業経営者というものは企業組織体の中にあつても、また企業相互間においても孤独な闘いに勝ち抜かなければならない。商売大事だと思えば、さげなくても良い頭をさげなければならぬ。同業者との関係ではいつも疑心暗鬼の状態でいなければならぬ。こつこつ状態から逃れるために職業人が互に慰めあい、扶け合うクラブが必要ですが、このクラブ親睦の確立のため、ポールは一つの職種から一名の会員し

かとれないクラブという考えに気がつきました。これが今日でもロータリー運動の支柱をなしている考え方である《一職種一会員》の原則です。

ポールのいま一つの目的は、従来西欧社会に存在した二つの職業間に横たわる溝をうめることでした。西欧社会では商人を中心とする企業経営者 business man と医者、弁護士、学者などの専門職業人 professional-man との間には、職業の本質が異なるものと考えられ、相互の協力は考えられるべくもなかったのです。すなわち、前者は直接金銭獲得を目的とするのに対して、後者は自己の信ずるアイディアの投下をその内容とし、直接金銭の獲得を問題としないためその助言と施療に対しては広く一般社会の尊敬を集めることができたのです。ポールは、商人と専門職業人との間に本質上の相違を見出すことができず両者は手段、乃至力点の相違にしかすぎないものと考えました。

このようにして、《一職種一会員制》と《職業間の相異の否定》は今日でもロータリー哲学の重要な柱をなしているのですが、一番始めにロータリアンたちが行なったことは、(1)例会出席の励行、(2)会員の相互扶助であります。例会出席の励行は、ロータリアンの基本的義務は口先だけでなく、実行にあるとする考え方の現われであり、最も初期の頃のある例会で『連続四回例会に欠席した者は会員資格を自動的に消滅すべきものとする』という議決がなされております。

会員の相互扶助というのは、会員の親類付合を奨励するためにとられた原則でロータリーは職業人のクラブですから、日常物資の供給その他の取引を会員に義務づけ、例会と例会との間に行われた会員相互間の取引を次の例会で報告させました。このような相互扶助の慣例からさらに会員相互の精神的相談を行なうという慣例が発生し、経営上その他万端のことについて相互扶助が行なわれたのです。そうこうするうちに、クラブ内部にも、また一般社会の人たちからも、この一会員の相互扶助はロータリアン内部だけのエゴイズムであるとの批糾が出されるに及び、ロータリアンは、このロータリークラブの相互扶助から生まれる親睦の精神をもって、社会一般の改善に役立てるべきだということになりここに始めて《奉仕》という概念に到達することになりました。つまり、ロータリアンは例会

において互に心がふれ合いそのふれ合いから相互の啓発が生れ、地域社会の代表的職業人の境地が一段と高められ、その会得した境地が職場、家庭、地域社会一般を潤おすという精神面の自覚が現われたのです。一九一五年に国際ロータリーの会長に選ばれたアレクサンダー・アルバート博士は、「実力を涵養し、かつ境地を高めることこそ、ロータリーの真の目的であり、真の意味である」と述べていますが、これは、ロータリークラブ活動が例会を中心に会員の精神的境地が交換されるという点にその基本的特徴をもつものであることを明らかに指し示すものであります。このことはまた、ロータリーが今日でも例会出席を重んずるといふ点となつて残っておりますが、この点についてはクラブ奉仕のところでもう一度ふれることになるでしょう。このようにして、一九〇八年頃になりますと、ロータリーは、会員が例会に職業人としての心を持ち寄り、それが、そこで互に切磋琢磨されることによつて、より高い境地を得、その心が職場その他の社会に影響するといふ理論構造がはっきりと与えられ、これをロータリーのな意味で《奉仕》と呼び、後に一九三〇年頃になると《職業奉仕》*vocational service* という言葉となつて結実したのであります。

このようにして、ロータリーの他のクラブに比類のない特質は《職業奉仕》にあります。ロータリーは金銭をバラまいて行なう社会奉仕とは、およそ次元の異なる奉仕を目的とする団体であるといふ点をよく御理解いただきたい。これに対して、ライオンズクラブは団体的金銭奉仕に徹し切ろうとする社会奉仕クラブであり、その奉仕理論はわが国において、高く評価されております。しかし、ロータリーの奉仕は、あくまで個人的精神的、かつ頭腦的などころにその根本的特色がありロータリーの存在根拠もここにあります。もっとも、ロータリーも団体的、金銭的奉仕をしないわけではありませんが、これはロータリーの本筋から言えば変形奉仕であり、これについては社会奉仕に関する箇所でも再びふれることに致します。

第三章 他の奉仕クラブとは

ロータリークラブの奉仕は例会その他のクラブ活動を通じて、地域社会の代表的職業人がその職業観と人生観を接触させ、その反省の中から各会員が新たな境地に到達し、この境地をもって社会万般の生活を営むことにより、社会全体にその功德が伝えられるという内容をもつものであることが前章で明らかにされました。ここでは、ロータリーの世界が外面的というよりは内心的、物質的というよりは精神的なものであることが分りました。

このロータリー運動は会員の智慧を交換することにより自己の精神を高める。そしてその高められた精神が一般社会の人たちと結びついたとき、周囲の人たちの自発的信頼と尊敬とによって支えられるところから、職業人と顧客との間に《信用》と呼ばれる信頼関係が生まれることとなり、企業経営そのものに大変な利益があるということが解りました。つまり特定の企業は、ロータリー哲学を実践することにより、厚い顧客層の保護を受け、長期的繁栄と不況期を安全に切抜けるという利益を受けることが判明したからです。当初いずれも中小企業の経営者であったシカゴクラブのロータリアン達がやがて地域社会経済の支柱と考えられるまでに到ったのは理由なしと致しません。

このようにロータリークラブはクラブ会員の精神的エネルギーを社会一般の改善に用いようとするクラブ活動としては世界で最初のものであり、このゆえに、ロータリークラブは世界最初の《一般的奉仕クラブ》であると呼ばれているのです。

ただ、アメリカではロータリークラブの名声が段々と高くなって行くにつれ、これに対して二つの反応が現れました。一つはロータリークラブに入会したいのにロータリーの柱である《一職種一会員制》がわざわざ入会希望者が入会できないことから、いま一つのロータリークラブを作ろうという動きがあり、一九一五年に創立された《キワニスクラブ》はこれですが、このクラブは公務員や政治職の人たちをも会員とする点がロータリーと異なりはしますがその奉仕哲学はロータリーと全然異

なりません。そればかりか、ここ一〇年くらい前から日本でもクラブ作りを行なっており、東京、名古屋、大阪、神戸等々でクラブが出来ているといえます。会費も安く、極めて質素に奉仕活動を行ない、アメリカ、カナダでは隠然たる力をもっており、日本での今後の活躍が期待されます。

いま一つの反応は、ロータリーとは別の奉仕哲学を唱導しようとするものです。一九一七年にテキサスのダラスのメルヴィン・ジヨウンス Melvin Jones という保険業者は精神面というよりは実践面、個人的というよりは団体的、精神的というよりは金銭的奉仕の方がよりよい奉仕だと考え、その奉仕を実現するための社交クラブを作り、これを《ライオンズクラブ》と名付けました。ライオンズクラブは、その会員に対して、企業が戦いであることを教え、戦いの勝利者としての基準たる黒字経営を奨励します。そしていかにして黒字経営を維持するかを個々の会員の知性にまかせます。そして企業間の戦いの勝利者たるライオンズクラブ例会でその獲得したお金の一部をクラブに差し出します。したがってライオンズクラブの例会に出席することは金を出すことを意味致します。ライオンズクラブでは、このようにして集めた巨額の金もち、これを社会に有用な目的、たとえば交通安全の標識、幸一精神病院の設立、消防軍の購入といった公共の目的のために支給するのです。このようにして、ライオンズクラブの顕著な特徴は、それが《社会奉仕クラブ》であるという点にあるということがわかるわけであり、金銭をもってする奉仕には、何かしら、明確で、外見的でさっぱりとしたところがあり、これがライオンズクラブの一般的印象となっているようです。ライオンズクラブは今から一五年ほど前にフリッピンのマニラを經由して日本に入り、今ではクラブ数においても、会員数においてもロータリーの約二倍あり、したがってその輝かしい奉仕活動はわが国の一つの潤いとなっていることは否定できません。

このようなライオンズの華々しい活動を見て、何人かのロータリアンはロータリー運動に対して不満をいだき、またロータリーの奉仕活動にライオンズの要素を採り入れようとするものもあります。しかし、これほどロータリーに対する誤解はありません。その理由はごく大ざっぱに言って、二つあ

ると思います。一つは社会奉仕ということを特定地域社会の政治的、経済的、社会的ひずみの是正と
考えて、これを金銭の投下によって解決しようとするとき、小さな田舎の社会の場合でも、年間数億
の金があるのです。いくら地域社会の代表的職業人の集りをもつても《一職種一会員制》の枠組
をもつては絶対達成不能の金額であつて、この点はライオンズクラブについても言えることです。
いま一つは、われわれの精神力の評価をどう考えるかということとです。代表的職業人がその精神力を
向上させ、ロータリー哲学に基づく経営を実践する。その功德は一瞬の尺度にはつきり写らないかも
知れませんが。しかし人々が互に《小さな善意》によって結ばれ、互に信頼という心の結び目によつて
結ばれるということは企業を安定させるばかりか、従業員とその家族を通じてやがて社会全体を明る
くせずにはおきません。その唯一の欠点は時間がかかり目にみえないということなのです。ロータリ
ーも決して金銭の価値を無視軽視するものではありませんが、精神的境地によつて支えられない金銭
を、社会改良の目的から言つて、無用のことと考へているのです。

第四章 国際ロータリーとは

一九〇五年に、世界で始めてのロータリークラブがシカゴに生れたことについては前にふれました。
それから二年たつて、ロータリーの親睦と奉仕の考え方を他の都市にも植えつけるべきだということ
になり、一九〇八年にはサンフランシスコに第二番目のロータリークラブが出来、次いで一九〇九年
には第三番目のクラブがオークランドに出来ました。このオークランドクラブはロータリーの世界で
始めて毎週一回の例会を昼食会にするという慣例を開きました。これが今日の毎週の昼食会の始まり
なのです。

このようにして一九一〇年になりますと全米に一六のロータリークラブが出来ました。シカゴクラ

プの会員チェスレイ・ペリーは、これら一六のクラブに対して共通の奉仕理念の維持と、それから全世界でのロータリークラブの設立の問題を処理するためには、シカゴクラブ単独ではできないことを悟り、これをロータリークラブの連合組織体によって行なうのが一番良いということ提唱し、これが一九一〇年に全米ロータリー連合会 National Association of Rotary Clubs となり、シカゴで第一回の大会を開き、会長にポール・ハリスを選び自分はその幹事となりました。その後一九一〇年にカナダのウイニペッグにロータリークラブができ、また翌一年にはアイルランドのダブリンやイギリスのロンドンにクラブが出来るようになり、かくして一九一二年に全米ロータリー連合会は国際ロータリー連合会と改称しないわけにいかなくなり、初代会長にグレン・ミードを選び、チェス・ペリーが初代の事務総長になり、丁度健康を害して引退したポール・ハリスを名誉会長に選びました。この国際ロータリー連合会は始め各クラブの連絡調整機関のようなもので、毎年大会を開き、全世界のクラブの提案を審議し議決は致しましたが、各クラブがこれに拘束されるか否かは各クラブの自主的判断にまかされておりました。しかし毎年の経験と全世界にロータリークラブが発展して行くにつれ、全世界のクラブに最小限の規準を遵守させることがどうしても必要だということになり、一九二二年のロスアンゼルス大会で、今日の標準クラブ定款が出来、この年の六月六日以降に設立されるロータリークラブは標準クラブ定款の遵守が法律的に義務づけられることになりました。このことは国際ロータリーの法的権限が著しく強化されたことを意味します。この時以降国際ロータリーの正式の議決は全世界のロータリークラブを拘束することになったのです。そして、この時国際ロータリー連合会の名称も Rotary International と改められました。

国際ロータリーの任務は、全世界のロータリークラブに対して、それがロータリーの基本原則を遵守しているかどうかの共通管理を行なうにあります。これを国際ロータリーの《直接監督》と呼んでいます。国際ロータリーは全世界に存在する各ロータリークラブがロータリークラブとしての最低の基準を遵守しているか否か、また遵守する上での問題点について助言を与えることをその任務とする

ものであって、各クラブの奉仕についての自主独立性、に制約を加えるものではありません。したがって、各クラブはその地域社会の独自性を考慮に入れつつ、自由に奉仕の道を選ぶことができます。国際ロータリーは国際大会の議決よりなる国際ロータリー定款及び細則に従って組織の管理運営が行なわれており、国際ロータリーの構成単位は各ロータリークラブであつて、各ロータリアンではありません。

国際ロータリーの管理運営の機関として、国際ロータリー理事会があり、一五名の理事が二年の任期で勤めており、この他に会長及び次期会長が理事会の構成員となつています。事務総長は職務上理事ですが票決権はありません。事務総長は理事会や国際大会の案件の整理や諸々の事務の執行の任にあたります。なおこの点と関連して次年度から日本は常時一名の理事を選出できることになり、日本ロータリーの発言権が強化されることは喜ばしいことです。

国際ロータリーは、全世界のクラブを《直接監督》致しますが、これを円滑にするためには全世界を《地区》と呼ばれる地域に分ち、各《地区》に国際ロータリー理事会権限をもつ者として《ガバナー》をおき、ガバナーを通して《直接監督》が行なわれるような仕組みとなつております。したがって、ガバナーは原則としてその権限を他の者に移譲してはならないことになっております。

ガバナーは国際ロータリーの権限を有する地区内唯一の役員であります。そして各クラブに対する《直接監督》と各クラブと国際ロータリー理事会との連絡調整の任をとり行ないます。ガバナーの地区内での最低限度の義務は(1)各クラブの次年度会長・幹事を招いて、国際ロータリーの方針を解説し、奉仕理論と実践上の問題について討議を行なう《地区協議会》を開催し、(2)各クラブに年間一回《公式訪問》を行なうこと、(3)地区大会を主催すること、(4)各クラブの例会出席率のデータを国際ロータリーに報告する義務があります。

ガバナーが地区大会で選ばれるところからガバナーを地区の代表と考えがちですが、これは政治的にそう言えても、法律上はそう言えることではありません。法的にはガバナーは国際ロータリーの側

の人物です。あくまで国際ロータリーの管理原則に従い、国際ロータリーの側から各クラブの運営を指導すべき、地区内の唯一の人物である点を理解していただきたいと思います。

第五章 ロータリーの綱領とは

ロータリアンにとつて一番重要な問題はロータリーとは何かという問題です。これさえ分れば、あとのことどもは余り苦しまないでも、かなり明快に解決することができるのです。クラブ奉仕にせよ、職業奉仕にせよ、また社会奉仕にせよ、国際奉仕にせよ、それからまた、クラブ定款や細則上の細かい疑問点は、悉く、ロータリーの实体に即して解釈しなければなりません。このようにしてロータリアンが何事を行おうとするにも、ロータリーとは何かが分っていなければ、自分はロータリーのだと思つていても、その思索や行動や結果が、客観的にみて、ロータリーのなるかどうかは分らないのです。現在の日本の数多くのロータリアンが、自分はロータリアンだと思つていても、その思索や行動が必ずしもロータリーのだとは限らないし、まして況や、それが社会一般の人たちから、尊敬と友愛をもつて迎えられるかどうかはなお分らないという状況が存在するのを見て、大変残念なことだと思つております。

それではロータリーとは何か。それはロータリーの綱領なのです。綱領はロータリーが生れた一九〇五年から初期ロータリアンの絶えず探究してきたところであつて、一九〇六年から一九三五年にかけて、真面目な討論が全世界のロータリアンたちによつてつづけられ、その間にいくつの変遷を経て、形の上では一九三奉のメキシコシティ大会で、実質的には一九五一年のアトランティック・シティ大会で確定し、今日のわれわれに伝えられております。ロータリーの綱領はロータリーの真髄です。だからこそこれは同文を以て、国際ロータリー定款第三条及び標準クラブ定款第三条に規定されてい

るのです。これがこのように国際ロータリーの側からも、またそれを構成する単位である各クラブの側からも、その憲法の条項に盛られているという意味をよく噛みしめていただきたい。このことは、つまり、ロータリーのありとあらゆる問題を解決するために、われわれは絶えずロータリーの綱領をもつてしなければならぬことを物語るものなのです。

綱領の本文は企業の根底に奉仕があるべきことを明らかにし、そして各ロータリアンがその理想をクラブ活動を通じて追求すべきことを明らかにしています。これはロータリーの本質を二旨で明らかにしたものです。一般の人達は、企業を物または労務と金銭の交換のことと考えがちです。つまり企業とは儲けのための営みとしてとらえようとするわけです。しかし、ロータリーはこのような平凡な考え方に対する反省を求めものなのです。たしかに損をしては企業は成立ちません。しかし、反面儲けさえすれば何を行ってもよいというものでもないのです。企業を永続的に繁栄させるには一個の取引が他の取引の誘因になることが望ましい。一つの商品をお客に売る時には商品プラス満足を売り、代金を受取る時には代金プラス感謝を受取るようにする。このようにする場合一個の取引に伴う両当事者の心の交流に着目してロータリーはこれを《奉仕》と呼んでいるのです。ロータリーのクラブ活動の本体はこの点にあることを綱領は日で明快に説いているのです。更に綱領は上の趣旨を説明するために、ロータリー運動が始められてから今日に到るまで発展させられてきた各種の要素を簡潔に挙げています。

先ず第一に「知り合いを拡めること」とありますがこれは親睦を意味します。親睦は泥棒や博徒の世界にもありますから、ロータリーの親睦はこういったものでないことは白から明らかです。ロータリーの親睦は紳士の親睦、クラブ例会で互に啓発し合う親睦のことです。互に心が通い合えばこそ、一例会ごとに学びそして一例会ごとに心の境地が高まるのです。

第二に、この心の交流を内容の側から考えてみます。ロータリアンは職業人ですから、職業観が交流するのです。それを三つに要約すれば、(1)自己の職業を天職と心得る、(2)職業に責賤なし、(3)互

に誇りを以つて職業の根底にある倫理規準を育てようということになります。

第三に、以上のことを例会活動を通じて追求して行くと、各ロータリアンは自から心の境地が高まって参ります。そうすると各ロータリアンは日常のすべての生活において、その心を以て行動せずにはいられません。ロータリアンの心は奉仕の世界に住みますので、その家庭、職場、同業者その他一般の社会生活の場における各ロータリアンの行動を通じてロータリーの功德が及ぶのです。これがロータリーの奉仕の実践となるのです。

最後に、前に述べてきたことから明かなように、ロータリーはその例会活動を通じ、親睦のうちに、精神世界の切磋琢磨を行ない、それが各ロータリアンの境地の向上になってあらわれ、その境地を以て、四六時中の行動を規律しようとするものであることが分りました。このような精神的向上運動は、必然的な結果として、地域社会の外に及ぶということが段々と分つて来ました。何故なら、われわれの肉体はその物理的存在の制約の下にあり、特定時所に所在しなければなりません。その肉体の中に宿る心は、このような制約を受けることなく自由に思いをはせることができるからです。この故にこそロータリーは、見たことも行つたこともない外国の人たちの不幸に思いを致そうとします。国際奉仕が、これであつて、われわれがパキスタンの台風の被害やビアフラ戦争の悲惨な出来事に対して金銭を送るのは、決して施しの立場ではなく、地球上に発生した一箇の不幸を、われわれ一人一人の責任においてとらえようとするものなのです。

第六章 一つのロータリー標語とは

ロータリーに奉仕概念が生れ出た一九〇七年の翌年のこと、一人の青年がミシガン大学商学部を卒業してシカゴの町にやって来ました。彼はミシガン大学で通常ミシガン学派と呼ばれていた経営学の

理論を学び、それを実践するためにシカゴにやってきたのです。彼の名をフレデリック・シエルドンと言います。

ミシガン学派というのは、通常の経営学の学説とはその立場を異にし、正統派の理論からすれば、むしろ異端の説と考えられておりました。正統派の経営学の理論から言えば、経営の本質は金儲けにあるとの一点につきます。赤字で経営は成立しません。どんな高邁な理想も、経営の世界においては、結果的に黒字となつて始めて、その正統性が検証されるのであって、資本制社会にあっては、自由競争の必然的帰結として、経営の世界は戦の世界であり、戦の世界に倫理は通用しないと考えられたのです。丁度ライオンズクラブの経営哲学こそ経営の世界では正統派の地位をしめていたのです。

これに対して、ミシガン学派の経営学者は少しばかり異なつた考えをもっていました。彼等も資本制社会が自由競争に根ざすものであることおよび経営が黒字の科学であるという点については正統派と同一の立場に立っていました。しかし、儲けの本質と儲けに到る諸々の過程については正統派と全く異なる考え方もありました。すなわち、彼等は商売とは一つの取引を通じて、両当事者が商品と代金の交換を行なうだけでなく、両当事者の双方に精神的満足の生れるものでなければならぬ。つまり、あそこから買えば良い品物が得られる、このお客様に買っていただいて有難いという要素があればこそ商取引が成立するのであって、ただ儲かれば良いというのであれば永続的な商業等は成立するものではない、と考えたのです。このようにして、一つの商取引を媒体として、両当事者間に互に信用と呼ばれる信頼関係が生れるという考え方、言いかえれば、不信用なこと非倫理的なことは一切商取引の世界から排除すべきだという考え方を中心に経営の理論を考えるべきだと彼等は考えたわけです。この人たちの考え方は一言にして言えば、金は何のためにあるかという問いかけなのです。人間は金なくして生きて行けない。それは人間がその知性と労働と物資を売って得た対価であり、それによって人間の生計が支えられる。そして、生計を支えるのは、人間の幸福という各自の終局の目的を達成せんがためである。このように考えて行くと、自分が一箇の取引から得た金銭の中には、それ

を中心に無限に汎って全世界に拡がる人間の幸福追求という精神的要素が含まれている、ということが判明するわけです。このようにして自分一個の幸せは他の全人類の幸せと無関係でないという自覚が生れ、この自覚の枠組みの中で経営を行なって始めて経営は本当の金銭を得、真の儲けを得、万人を幸福という紐帯によって結びつける経営を行なうことができる、と考えられたわけです。

このミシガン学派の若き秀才はシカゴで本屋を開き、その資格でシカゴクラブに入会しましたが、彼は当時シカゴクラブで生れつつあった《奉仕》にこの考え方の本体を見出したのです。シエルドンはロータリーの奉仕の本体を経営そのものの中に見出し、儲けそのものの中に見出したのです。それは当時多くのロータリアンが《奉仕》をもって金銭的施しと考えていたのとは次元の異なるものだったのです。

このようにして有名な“*He profits most who serves best*”《奉仕に徹すれば最大の利益あり》という標語が出来、これが一九一一年の大会で議決され、一九五〇年の大会で更に追認されているのです。

これと時を同じくして一九一〇年に設立されたミネアポリス・クラブの初代会長フランク・コリンズはロータリーの実体を“*Service, Not Self*”《奉仕だ、私利私欲ではない》と表現し、これも一九一一年の大会の議決になりましたが一〇年ほど経て、この*Not Self*という表現は、自己否定が強すぎてロータリーの奉仕の立場、つまり、金銭的利益の裏付けとしての倫理的要素乃至人格と相容れないという主張がシエルドンによってなされ、*Service Above Self*《自分よりも先づ奉仕》と変えられ、この形で一九五〇年のデトロイトの大会の議決を受けております。

このようにして、この二つの標語は最終的な形では、いずれもロータリーの哲人フレデリック・シエルドンによって作られたものであり、いずれもロータリーの本体を簡潔な形で示すものです。表現というものは簡潔になればなるほど誤解を受けやすく、いずれについても厳しい批判が行なわれてきました。*He profits...*については、奉仕を餌にして儲を釣る考え方だ、とか *Service Above Self* については経営の実体に反する空念仏であるとかいわれましたが、いずれも標語の生れ出た思考を知ら

ないでなされた的はずれの批評と言えましよう。二つの標語は、ロータリーの本体である各ロータリアンの自己改善が企業経営に乗り移り、そして経営に直接または間接に利害関係をもつ人たちに、その企業経営の過程という金銭授受の中に、その精神的功徳の湊透すべきことを説くものに他ならないのです。これは古来わが国にも一般に語り伝えられてきた《情は他人のためならず》とか《積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃あり》という表現といささかもその内容を異にするものではありません。ポール・ハリスも言っているように、ロータリーは儲けの金高を云々するものではなく、儲け方を問題にするのである、と考へても、二つの標語についての正しい理解を得るでしょう。

第七章 ロータリーの職業倫理訓とは

いままでの二章にわたって解説を行ってきた《ロータリーの綱領》《二つのロータリー標語》は、若干異なつた方法をとつてはおりますが、いずれもロータリーの本体を簡明に表現したものです。これらの表現は、しかしながら、どちらかというところロータリアンの内部規律なのです。つまりこれら二つのものはロータリアンに対してロータリーとは何かを、ロータリアンのクラブ生活に即したやり方で説いているという重要な事実を忘れないでいただきたいものです。これらは決して一般社会人に話して恥かしいような内容はありませんが、外の人に話すためというよりは、専らロータリアンの心に呼びかけている大原則だということができます。

これに対して、ロータリアンの中には、ロータリーの説く原理を社会一般の人にも適用できるものとして明らかにする必要があると主張する者があります。これは至極当然のことなので、本来ロータリーにあつて《一職種一会員制》という形で会員を制限するのは、奉仕の効率を高めるために先ず質の甘同い思索を交流させようという発想以外の何ものでもないのですから、ロータリアンたちが例会

で交流させる思索は、必ずや、各ロータリアンの職場その他の社会生活で、ロータリーに所属していない一般の人たちとの思想的交流をもって始めてその初期の目的を達成することができるのです。というよりは、ロータリー運動が運動として成立つためには必ず一般社会人の支えがなければならぬのですから、ロータリーの思想がロータリアンたちだけの間で温存されているのでは、ロータリーとは言えないと言った方が正しいかも知れません。このような考え方から、ロータリーはその伝統形成の過程で、ただ単にロータリアンたちだけでなく全世界の人びとと共有すべきロータリーの原則を明らかにして来ました。その一つがこの章で述べる《ロータリーの職業倫理訓》で、いま一つが次の章で述べる《四つのテスト》です。

《ロータリーの職業倫理訓》とは一九一五年のサンフランシスコ大会の正式の議決であり、後に国際ロータリー細則第二八条によって確認された総計一ヶ条からなる倫理原則のことを言います。その内容について知りたい人は、『ロータリーの友』の昭和四六年二月号の画大太郎・ガバナーの『職業奉仕のある見方』の中に全文が引用されており、また一九一五年に書かれた初期ロータリーのバイブルと直言すべき、『ガイガンディカー』『ロータリー通解』一東京田無クラブ発行・小堀訳の末尾に更に完全な訳文が掲載されていますのでそれを読まれることを希望致します。

この《ロータリーの職業倫理訓》の由来上るまでには初期ロータリアンのロータリー探求の努力がいかに真面目であったかを知らされる次の逸話が残されています。一九二二年のバツファロー大会でのロータリー会長ラツセル・ゴ・グラインナーの提唱でロータリーは今や全世界の職業人に対してロータリーの実践的職業倫理訓を宣明すべきだということが議決されたとき、この作業の任を負わされたのはアイオワ州のシュー・シテイのロータリークラブであつたのです。このクラブは田舎クラブで傑出した人物は一人もいませんでしたが、委員長ロバート・ハント、そしてその退任後は牧師の「R・パーキンスを中心に全委員が絶えず相談し合つて事を運び、始めは、当時の全ロータリークラブからアンケートをとることから仕事を始め、二年間にわたつて、その分類整理と起案の作業を熱心に行な

つた結果、ロータリーが人類文化史上に残した最大の業績の一つが完成されたという重要な事実を残しました。シウ・シティのロータリアンの全員の協力がどの偉大な大物ロータリアンもなし得ない業績となったという事実は、クラブ奉仕の尊さを知らされる好い事例です。

この一ヶ条を更に要約すると次の四ヶ条になるように思われます。

- 「1、自己の職業を天職と心得べきこと。
- 2、職業の相手方を心の友と心得べきこと。
- 3、一箇の取引に直接又は間接に利害関係を有する者を幸せにすべきこと。
- 4、各自に与えられた社会的、経済的、政治的状况は千差万別であるが、

一度、自己の力を行使するときは全人類を潤すがごとくこれを行うべきこと。」

この優秀な職業倫理訓は当時のアメリカの経済に大きな影響を与えただけでなく、戦前の日本のロータリアンにも多くの影響を与えております。ことに大連クラブが行なった《ロータリー宣言》は五ヶ条からなる信念の表明ですが、これは会員古沢丈作が日夜《ロータリーの職業倫理訓》を暗誦した結果得られたものであり、昭和一年の地区大会前夜懇談会ではこの《ロータリー宣言》をロータリーの綱領にすべしとまで主張され、熱心な討論が行なわれたという有名な話が残されています。

その後《ロータリーの職業倫理訓》の表現方法に宗教的臭いがあるというので国際ロータリー理事会は、自発的にその配布をやめました。これはあくまでも表現の問題であって、《ロータリーの職業倫理訓》の精神そのものには少しも非難に値するものではありません。それから五〇有星霜を経て、公害問題や戦争の惨禍についての反省が高まりつつあるとき、ロータリーの説く職業倫理訓がいかに今日の人類の幸福にとつて、必要不可欠なものであるかを明かに理解することができるのです。今日の日本のロータリーもここに立ち返る必要があると思えます。

第八章 四つのテストとは

《ロータリーの職業倫理訓》とやらんで、ロータリーが、ただ単にロータリアンだけでなく広く一般社会人にも呼びかけている倫理基準に《四つのテスト》があります。この《四つのテスト》は元々、国際ロータリーの大会の議決であるというよりは、一ロータリアンが一九三〇年代のアメリカ経済恐慌でツブれた会社の再建に使った言葉です。この人の名をハーバートニアイニフーと言いますが、彼は自分の会社を再建したばかりでなく、その後一九四九年に国際ロータリーの会長となりその時にこの《四つのテスト》の版權を国際ロータリーに譲渡しそれ以来、ロータリーの準公式の倫理基準になったものです。《ロータリーの職業倫理訓》がそのいずれをとってみても、知性を大上段にふりかざし、伸々荘厳な姿をして人々に伝えられているのに反して《四つのテスト》は誰にでも分りやすく、てらい気の少しもない姿をしてわれわれに問いかけてきます。《職業倫理訓》が仁王様なら《四つのテスト》は弁天様のような感じがしないでもありません。それはともかくとして、ハーバート・テイラーがこれを思いついたいきさつから話に入って行くことに致しましょう。

一九三二年のことハーバートニアイラーは裕福な食品会社の社長の地位をやめて、破産状態となっていたアルミ食器会社の社長を引受けました。社長に就任してから六週間の間、彼は会社再建の秘策を練りましたが、彼の思策は資金ぐりとかいうことよりも、会社従業員の団結と和にありました。つまり彼は、企業は人なりの立場から従業員の心を結集することが焦眉の急務だと考えたのが、一般の経営者と異なったところでした。宗教的信条・教育等々すべての点で千差万別な全従業員に理解ができ、と同時に容易に実践可能な座右銘はないかと考えた結果、ある朝社長室の机に向ったとき一つのアイディアが浮びました。

「言行はこれに照らしてから

1、真実かどうか

2、みんなに公平か

3、好意と友情を深めるか

4、みんなのためになるかどうか

これを一枚のカードに書いてから、彼はそれぞれ宗教の異なった四名の重役を呼び、「この基準でやると、宗旨上まづいことは起らないか」とたずねたところ、いずれの役員も「これなら良いです」と言うので、全従業員を集めて、今後会社の業務の遂行は、この基準に従ってとり行なうべきことを決めました。

テイラーは会社の方針として、誇大広告や他社製品と比較して、優越するような広告を禁止し商品の用途についての忠実な解説を広告にのせることを決めました。それから間もなくして、会社は印刷物を作るためある下請会社と契約を結びましたが下請会社の社長は契約成立後に、入札の時の計算に一五〇ドルのミスを見つけたのです。責任は自らが負うべきだとは思いましたが、何か救済はないかと思い、テイラーに再考を求めたのです。テイラーの会社は破産寸前です。他人の会社のミスまでかばっていられる状態ではありませんでした。しかし、役員会は下請会社の誤算からくる窮状を放置することは《四つのテスト》の第二の公平(公正)かどうか反するということで契約価格一五〇ドル増額を決定しました。

この情報が伝わるや、下請会社ばかりでなく、全従業員は感激しました。会社は打って一丸となって動き出し、当初六、七ドルの借入金で始まった会社が五年後には元利合計完済し更に一〇年後には一〇〇万ドルの配当を株主に出す大会社となるようになりました。

《四つのテスト》は業界の評判になり、シカゴ商工会議所の経営講習会の席で紹介されたとき、何人かのロータリアンがこれに出席していて、同僚ハーバート・テイラーのアイデアを知り、シカゴクラブの例会で披露され、ロータリーの世界に導入されたのでした。

この《四つのテスト》は1と他のものとは叙述の内容が違います。1は述べられる事柄の内容が

真実であることを要求しています。しかし、2、3、4は真実を發表すべき状況を定めたものです。したがって、「ロータリアンは真実のみを語るべし」しかし、「人間関係の改善の目的のためにのみ真実を語るべし」(他人の気を悪くするようなことを口にするな)ということになります。《四つのテスト》が集団の心の結集をはかるのに最善のものであることがこのようにして分るのです。

全世界のロータリアンがこの《四つのテスト》を社会一般に提唱したところ、これが実は会社経営の場だけでなく、犯罪予防や青少年育成にも際立った効果があることが分り、千差万別な奉仕の分野にも適用できるようになったのはロータリーのために喜ばしいことです。

しかし、この《四つのテスト》は、どちらかというと同質社会における人の和に役立つという一つの限界性をもっています。したがって人生觀の根本において信条の異なる問題、たとえばある世代の人達が幸と考えていることを次の世代が不幸だと考えているような場合や、多くの思想の対立から生ずる問題に対して、その橋渡しをすることができません。ところがロータリーはあらゆる思想・信条の対立に対して完全な自由を個々人に与えると同時に、その各々の立場が相互に接触することによって、互に尊敬と善意と改善を図れるようにするところにその本体があります。このようにして《四つのテスト》は《職業倫理訓》や《綱領》や《標語》に比して、その活動分野が狭いのだということはふまえておかなければならないでしょう。

第九章 クラブ奉仕とは

クラブ奉仕とはロータリークラブの一人一人の会員が自分のクラブの管理・運営・実施の一部を分担することを言います。もっと平たく言えば、クラブ活動に参加することをいうのです。クラブは親睦団体ですから、クラブの各会員が互に親睦を深める行動を共に行うことであると考えてもよいと思います。ただ、この考え方に立つとクラブの各会員が達成しようとする《親睦》のための活動が何故

《クラブ奉仕》と呼ばれるのか、という問題が生じます。《親睦》はあくまで《親睦》であって、《奉仕》とは次元が異なるのではないかと考えられるからです。ロータリーの歴史をひもといてみますと、たしかに、このように考えられた時期もありました。初期ロータリーの発展についてみれば《一般的奉仕》という考え方が生れた一九〇七年からしばらくの間は、ロータリークラブは《奉仕》の開発が目的であって、クラブ親睦のごときは、次元の低い活動であると考えた人もありました。

しかし、ロータリーのクラブ活動についての理論的認識がだんだんと深まって行くにつれて、そうではないということがはつきりしてきました。つまり、各ロータリアンの目的は、自分の職場、同業者、家庭、一般社会の、あらゆる場において《奉仕》を实践するものであるとしても、《奉仕の實踐》の前に《奉仕の心》を作りあげなければならず、この《奉仕の心》を作るのが、ロータリークラブのクラブ活動なのだと考えられたのです。ロータリアンが毎週の例会に集り、親睦のうちに相和すると、各会員相互の心が通い、互に啓発し合い、その反省の中から各会員の心の境地が高められるという点については第二章でふれておきましたが、このようにして形成された《奉仕の心》があればこそ次に諸々の社会生活の中でのロータリアンの《奉仕の實踐》が伴うのだということが分ってきました。つまりクラブ親睦は、このように考えてきますと、《奉仕の實踐》の前提となる《奉仕の心》の形成のことだということになり、かくしてクラブ親睦は奉仕を構成している二つの要、素、すなわち、《奉仕の心》と《奉仕の實踐》のうちの前者の形成を目的とするクラブ活動なのだということになり、クラブ親睦は《奉仕》と次元を異にするどころか同一次元のウラ表の概念であるということが分り、このようにして《クラブ奉仕》と呼ばれることがロータリーの奉仕哲学の立場からより正確なのだと考えられるようになったのです。

このように考えてくるとクラブ奉仕の特徴がはつきりとして参ります。先ず第一に、クラブ奉仕は、ロータリーの唯一の団体的活動であるということが出来ます。このように言つと、皆さんの中には社会奉仕に団体的活動があると反論する人が出てくると思います。しかし、それは思策が浅いからそう

見えるまでのことであり、ロータリーの団体的社会奉仕の本質をどのように理解すべきかについては後で詳しく述べることに致しましょう。

話をもとにもどして、ロータリーは対外的実践の場で一切徒党を組むことは致しません。クラブ以外の場では一人一人のロータリアンが自己の良心の命ずるところに従って行動することを期待しています。そうするとクラブ奉仕だけが、ロータリーが各ロータリアンに命ずる団体的行動だということになります。だからこそ、ロータリーは最も初期の頃から「連続四回例会を欠席した者は会員資格を自動的に消滅すべきものと定む」という原則を確立したのです。クラブの例会に出ないものはロータリアンの資格を剥奪するという厳しい態度が出てくるのです。

しかし、反面、クラブ例会にただ出席すればよいというものではありません。例会出席を通じて地域社会の代表的職業人が互に啓発し合うためには、単なる例会出席という法律的義務の履行にとどまらず、更に積極的な何かを互に与え合わなければなりません。その積極的な何かの内容をどう決めるかは、各自のロータリアンの良心と力量にまかされているのであり、ここにクラブ奉仕の倫理的側面を理解することができます。

それではその内容は何か。大まかなところを述べておきましょう。第一に、クラブ例会では各ロータリアンが各自の職場の義務感と圧迫から解放されるような雰囲気を作ることです。ロータリーの例会で一週間の職場の垢を洗い流し、例会が終わった時に、もう一週間一働きをしようという気分を起させるような例会の雰囲気作りをすることです。第二に、互に心が通い、童心をとりもどし、気分が解放的となって、会員同志が互に親類だと思ふような状態にすることです。一人の会員の幸せは他の会員の幸せであり一人の会員の不幸せは他の会員の不幸せであるといった確信がクラブ活動から生れ出ることが望ましい。互に企業の失敗やら家庭の内部のことまで相談できるようになれば、クラブ奉仕はほぼ達成されたということができましょう。

このように見てくるとクラブ奉仕の第二の特徴が出てきます。それはロータリーが《話し合い運動》

だということ。地域社会の代表的職業人が毎週一回例会に集まり、その《話し合い》の中から何かを産み出そうとするものなのです。ロータリーが《話し合い運動》であるということから《話し合い》と相いれない生活態度、例えば暴力や偏狭な自己主張はロータリーの認めないものだということが容易に分ります。ロータリアンは自己の立場を相手方に伝えはするが、ジョークに富み、寛容と雅量をもって他者に学ぶという態度が要求され、この結果得た心の進歩が《奉仕の実践》のエネルギー源となるのです。

第十章 職業奉仕とは

今日一般に「職業奉仕とは職業を通じて社会に奉仕することである」という定義が行なわれております。しかし、この定義は、ロータリーの諸々の奉仕、つまりクラブ奉仕・職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕との相関関係において述べられたものであるという一点をふまえて理解しないと大変な誤解をまねくこととなります。前にも述べたように、ロータリークラブは《一般的奉仕クラブ》であって、地域社会の代表的職業人が例会において、その人格を磨き、その功徳を地域社会万般のことに及ぼすことを目的とするものですから、ロータリーの中心となるものは《奉仕》そのもの以外にはないのです。この立場からすればロータリーの奉仕は一つ、それは《一般的奉仕》であるということができます。そしてこの《一般的奉仕》の内容は、各ロータリアンが例会において職業人としての心を磨き、そして、その磨かれた心をもって社会一般を潤すことであるといつて良いでしょう。しかし、その後ライオンズ・クラブのように、金銭的奉仕のみに徹する社会奉仕クラブが現われるに及んで、ロータリーの奉仕もその関係において明らかにする必要が生じロータリーはその目的とする《一般的奉仕》のことを《職業奉仕》 vocational service と呼んだのです。この立場からすれば、ロータリーの

奉仕はただ一つ、それは《職業奉仕》であるということになり、その具体的内容は一業一會員制に基づいて選ばれた良質な奉仕の心をもった職業人が例会活動を通じてその職業観を親睦のうちに磨き、その功德を社会一般に及ぼすことだ、ということになります。これが最も広い意味乃至本来的なロータリーの《職業奉仕》なのです。このように述べると、よくお勉強の方は、《職業奉仕》とは前の章で述べた《クラブ奉仕》と同一体の別の側面であるということに気づかれるでしょう。まさにその通りなのです。ですから私は、従来「クラブ奉仕の裏付けのない職業奉仕はロータリーの職業奉仕ではない」と説いて来たのです。

週に一回の例会で絶えず定期的に會員の相互啓発が行なわれ、しかもその相互啓発たるや、地域社会に存在するすべての職種の中から一番ロータリーの職業観をもつ職業人を、ロータリーの代表として選ぶという選考方法でなされたものですから、例会には最も良質な知性と奉仕エネルギーが満ちあふれていることが当然の前提となっており、これが相互接触を行なうことによって、更に一層すぐれた知性と奉仕エネルギーとなつて、地域社会万般に伝えられることになってくるのです。この意味での《職業奉仕》はロータリーの他の団体に比類なき優秀性を示すものだと言つことが出来ます。「ロータリー」とは思想改良運動のことでありそれは個人としての改善から、職場その他社会万般に及ぶものである」とか、「自分の職業だけ行なつていたのでは職業奉仕ではない。自分の職業観を他の社会人に広めて始めて職業奉仕となる」とか「ロータリアンはロータリーが業界に派遣したロータリーの代表であるから、同業者に対してロータリーの開発した職業倫理を提唱すべき倫理的義務を負う」等とすれば主張されているのは、みな、この最も広い意味、かつ本来的な《職業奉仕》の立場に立つて述べられたものなのです。

しかしながら、ロータリーはこのような最も広い意味かつ本来的な《職業奉仕》の開発を行なってきたところ、幾つかの問題にぶつかり、その中から、どちらかといえば、異質的乃至変形的奉仕概念を産み出してきました。これは《社会奉仕》や《国際奉仕》なのですが、これらをロータリーの奉仕

として認めるべきか否か、そして認めるとすれば、どの範囲でこれを認めるべきかという問題については多くの議論の闘わされたところであって、この点については次の章で詳しく述べることに致しましょう。ここでは、これら《社会奉仕》や《国際奉仕》をロータリーの正統な奉仕だと認めた上で、これらの奉仕をロータリーの《職業奉仕》との関連でどう位置づけるかという問題が起ります。別な表現を用いますと、最も広い意味かつ本来的《職業奉仕》とは奉仕の心の形成及び実践一般のことであって、《クラブ奉仕》が、その手続的側面であり、《職業奉仕》はその実体的側面であるということになってしまい、その奉仕の心の実践の中には、ただ単に職場での実践の他に、家庭や社会一般の生活の場における実践も含まれてしまうことになります。つまり、最も広い意味かつ本来的《職業奉仕》の中には《社会奉仕》や《国際奉仕》が論理の当然のこととして含まれていることとなります。

そこで、ロータリアンが家庭や社会生活で《奉仕》を実践することを、一応《社会奉仕》として類型的に分離し、また《奉仕》の心が諸外国にまで及ぶような実践活動を、一応《国際奉仕》として類型的に分離致しますと、もつとも、この分離の仕方にも問題はありますが、残された分野は、ロータリアンがその《奉仕》の心を各自の職場において実践するという類型が残され、これが《社会奉仕》や《国際奉仕》との相関関係において考えられた《職業奉仕》であり、最も広い意味かつ本来的《職業奉仕》からすれば、狭い意味かつ技術的《職業奉仕》ということになりましょう。なおここでは、この狭い意味かつ技術的《職業奉仕》はロータリークラブ組織内での権限分化をその背後におき、各種奉仕委員会の職能分化に対応する《職業奉仕委賞会》の権限の角度から考えられた《職業奉仕》と一致するものであること、ならびに、各ロータリアンがロータリー精神に立ちかえるためには、この技術的《職業奉仕》より、本来的《職業奉仕》の方が重要なのだということに附記するにとどめましよう。

第十一章 社会奉仕とは

ロータリーの世界では一九二三年のセント・ルイスの国際大会の決議三四号というものがありません。この決議は通常ロータリーの奉仕のうち、『社会奉仕』に関する基本原則を定めたものといわれております。これはいわばロータリーの社会奉仕の憲法ともいべきものであり、またこの決議はその後の国際大会で数回にわたって修正を受けましたが、依然として現行法規をなしていますので、どのクラブでも『社会奉仕』に手をつける以前に必ずこの決議三四号の規定に十分な理解をもってかからないと、自分達は社会奉仕を行なったつもりでも、実質的には『ロータリーの社会奉仕』となっていないという場合が起りますので、この点御注意いただきたいと思えます。

決議三四号の内容を解説する前に、この決議がなされた歴史的背景について簡単に述べておかなければならないでしょう。前にも述べたように、ロータリーに奉仕という考え方が生れたとき、奉仕の内容乃至本質について二つの考え方がありました。一つは奉仕を以て困窮者に対する施しとするものであつて、この立場から初期ロータリアンはロータリアン個人として色々な善行をほどこしています。またシカゴ・クラブが最初に行なった団体的社会奉仕として公衆便所設置の運動があつたことは余りにも有名な出来事です。

しかし、一九〇八年になりますと、ロータリーの哲人フレデリック・シエルドンの鋭い分析的思考によつて、ロータリーの奉仕というものは、困窮者に対する救済であるよりは、もつと質の異なる行動だということになりました。その理由は大まかに言つて次の二つとなります。第一に、ロータリークラブは『一職種一會員制』をとつておりますので、その会員数や財力から言つても社会問題の救済には不資格であるということです。第二は困窮者に金を出すことが、必ずしも問題の根本的解決にならないことが多い。このような反省に立つて、ロータリアンの奉仕はどうあるべきかを考えたシエルドンは次の結論に到達したのです。すなわち、われわれロータリアンが企業の管理者としての地位を

得た所以は、元々われわれに一頭地高い精神の状態があつたからであつて、もしわれわれがロータリーの例会を通じてその心を磨いた場合、その自己改善の功德は必ずや職場その他ありとあらゆる生活を通じて周囲の人々を潤すことになる。職場においては従業員が、業界においては同業者が、家庭においては家族が、そして一般社会においてはすべての社会人がロータリアンの人格に傾倒するようになれば、それ即ち《ロータリーの奉仕》になるものと考えられたのです。このようにして、ロータリーの奉仕は各ロータリアン個々人の精神の質の向上とその実践であると考えられたのでした。このようにしてロータリーの奉仕は、まさに個人的かつ精神的なものと理解されたのでした。このような状況の中にあつて、これと異なつた行動を以て奉仕の実践と考へていたクラブもありました。

一九一二年以降のことなのですがニュー・ヨーク州のシラキューズ・クラブ以下数クラブは身体障害児の養護施設が当時なかつたことから、これらの障害児が放置されたままになつてゐる社会問題の重要性を看過すべからざるものと考え、クラブ財源を以て団体的に救済事業を起し、大きな貢献を社会に対して与えました。しかし、ロータリー哲学の正統派は、ロータリーの奉仕はあくまで個人的・精神的たるべく、団体的奉仕の如きはロータリーの本質にもとるものと非難しました。

実はこの対立を解決し、団体的社会奉仕のあるべき姿を示したのが、この決議第三四号なのです。決議第三四号はその冒頭においてロータリー哲学の本質にふれその論理的帰結として団体的社会奉仕のあるべき姿を次のように定めています。

- 一(一)ロータリーは例会その他を通じてロータリアン個々人の教育を行ない、その人格向上を通じて社会に奉仕するものであるから、あくまで個人的奉仕が中心であること。
- 二(二)ロータリークラブが団体的社会奉仕を行なう場合、それは社会的問題の救済という側面よりもあくまで、その行動を通じて各ロータリアンの教育に資するものと考えべきこと。
- 三(三)ロータリー・クラブが団体的社会奉仕を行なおうとするに當つては、(イ)先ず社会の実状と問題点を事前調査すること。(ロ)社会問題が発見されてもクラブ財源に対する不当な圧迫とならないかを

確かめるべきこと。(八)当該問題を処理すべき専門機関があれば、これを側面から援助し、自ら救済活動を行なつてはならないこと。(二)専門事業団体が存在せず、(口)にも抵触しない場合にのみ、団体的社会奉仕を行なつてもよい、と定めています。

これを読むとロータリーの奉仕はあくまで職業奉仕であつて、団体的社会奉仕はあくまで職業奉仕の大枠すなわち各ロータリアンの教育の範囲内においてのみ認められるということが分ります。しかし、このことはロータリーの団体的社会奉仕にあつても、その眼目は金銭よりも善意の行動、施しよりも、思いやりの心にあるという点から考えれば、この決議の結果、ロータリーの社会奉仕の範囲は現実に狭められることを意味しませんので、多種多様な社会奉仕、例えば、医療施設、教育機関、公共施設に対する援助や、災害救済や環境整備や諸々の青少年育成活動となつて行なわれており、この点でも、ロータリーの功德は大いに社会改善に役立つといつて良いでしょう。

第十二章 青少年奉仕とは

ロータリーの社会奉仕の分野で一番重要なものに《青少年奉仕》の分野があります。これは、青少年がわれわれロータリアンの世代の後継者として近い将来に社会の指導者となつて登場し、しかも天地の理法としてわれわれロータリアンは次代の指導者に円滑裡に社会の指導権を引渡さなければならぬという厳然たる事実に基づいております。意識的かつ無意識的に、初期の時代からロータリアンたちはこの事実をふまえて、諸々の《青少年奉仕》に従事して参りました。

最も初期の時代のものは一九〇六年の出来事であつて、このロータリアンの氏名が残されていないのが残念なことです。あるシカゴ・ロータリアン「書物には、このように記されています。冬が冬の昼近くにロータリーの例会に出席しようと思つて街を歩いていると新聞売り子の少年が外套も手袋

も身につけず寒さにふるえていた、というのです。新聞を買おうと思ったが小銭がない。紙幣を出す
と、「お釣がない」と言う。そこで「これからおじさんは面白い所へ行くのだが、その新聞全部持つて
ついて来いよ」とさそったというのです。シカゴ・クラブの例会場に入った彼は友人から小銭を借り
て新聞を買い、自分のセーターをぬいでその少年に着せ、「人生つらい時は誰にでもある。それを耐え
忍ぶところに生きる価値がある。やがて君はその鍊磨によって偉大な人間になることができるのだ。
頑張れよ」とはげませば、これを見たシカゴ・ロータリオンは皆少年から新聞を買う。また、あるも
のは手袋をぬいで、この少年に贈るというのでまたたく間に新聞は売切れ。少年は幸せそうに例会場
を去っていった、というのです。

このような経験的事実の積み重ねからやがて一九一〇年になると、シカゴ・クラブは始めて《社会
奉仕》を管理する委員会を作ったのでしたが、この委員会の推進したプログラムには青少年に対する
奉仕がかなりの分野を占めていました。たとえば一九二二年に創立されたボーイ・スカウトやガール・
スカウトに対する財政的援助や、困窮者に対する奨学金の支出とか体育競技の育成や非行青少年に対
する対策の援助や、ユース・ホステルの設置等々は悉く、ロータリー運動の推進過程に育成された
という事実を御存知ないロータリオンが意外と多いのは残念なことです。そういえばロータリーに団体
的社會奉仕の基本原則を確立した、一九二三年の決議第三四号の発端は身体障害児養護施設設置であ
って、これまた青少年奉仕であったのです。

これら青少年のためにする奉仕が金銭支出の形で行なわれる限り何時も問題になるのは、救済の範
囲が限定されてしまうことです。たとえば奨学金支出の場合、奨学金を申請した者は救われるが、そ
の他の無数の同じ環境におかれた者は救われなくて放置されるという悩みです。これをロータリーの
職業奉仕とのかかり合いにおいて一体どのように解決すべきかという問題は初期ロータリアンの最
大の問題の一つでありました。彼等が到達した結論は、金銭の支出を以てする奨学金やその他の
制度よりも、青少年に対して職業指導や職業上の相談に乗ったり、また職業訓練所を設立する方が金

金の支出を実質的な目的に多角的に利用できるということでした。同じ金銭を支出するならば一発のみの効果より、多目的多角的効果を挙げようとする考え方です。

そうこうするうちに、第二次世界大戦も終る頃になってから、職業奉仕やクラブ奉仕に対する見方と社会奉仕に対する見方との間には本質的な相違はみられないという認識が深まるにつれて、青少年奉仕に新たな考え方が生れ出て来ました。ロータリーの出発点である例会出席を以て始まるクラブ奉仕は、地域社会の代表的職業人がその知性を錬磨することを目的とするものであり、これは必寛個々のロータリアンの自己の限界性への自覚であり、その壁を打破するため他者への依存を、その本質とするものであり、かくしてクラブ奉仕の本体は《共にする奉仕》であるということになりました。そしてクラブ奉仕で得た人格の向上を職場で実践するのが一狭義の職業奉仕だとすれば、職業奉仕はロータリアンたる社長と非ロータリアンたる従業員が共にスクラムを組みロータリー精神の下に打って一丸となることであり、この一点からすれば、職業奉仕の本質もまた《共にする奉仕》であるということが分りました。そして青少年奉仕の分野でも、青少年のためにする奉仕ではなくして《青少年と共にする奉仕》言えかえれば、ロータリアンと青少年が互に接触し合い、共に世代の相違と思考と相違を尊重しながら、共に社会の一構成員としての自覚から互にスクラムを組みアイデアを交換し合うクラブ活動が必要だと考えられるようになりました。この考え方から一九六二年に、高校生を主体とする《インターアクト・クラブ》が更に一九六八年に大学生又は一七歳以上の青少年職業人を主体とする《ロータリーアクト・クラブ》が生まれました。これらのクラブは組織的には国際ロータリー理事会の定める原則に従い、ロータリークラブがこれに対して生殺与奪の権限を握っているような外観を呈しておりますが、これは法律的にそうなっているだけのことであって、提唱ロータリークラブはこれらの青少年のクラブに対して一切の優越的権限を行使するものではありません。ロータリアンが次の世代の人たちとスクラムを組み同じ土俵の上で啓発し合い、尊敬の念をもって世代の相違を認め合えるということは何と素晴らしいことではありませんか。

第十三章 国際奉仕とは

ロータリーに《国際奉仕》の分野が開けたのは一九一四年の第一次世界大戦の勃発のことです。当時のロータリーの拡大の状況は今日からみればまだ微々たるものではありませんでしたが、しかし、ロータリーはアメリカ合衆国内の都市ばかりでなく、一九一一年にはイギリスのロンドンを始めとする数都市やアイルランドのダブリンにも創立されていました。これらのクラブに所属するロータリアンたちはロータリー哲学の追求には極めて熱心であり、一面において彼等は地域社会の職業人の奉仕の心をクラブ親睦の中から会得するとともに、地面においては、各ロータリアンがその奉仕の心をクラブ以外の実生活で実践に移すことこそロータリーの本体である、という一般的理解に到達しており、そして、彼等はその場を世界大戦において見出したのでした。かくして彼等は出征軍人や傷病兵の慰問等々の作業に手を染めたのでした。しかし《国際奉仕》の実践を通じてロータリアンたちが反省したことが二つありました。一つは《国際奉仕》は、単に個々の事例で人のためになるといふよりはその実践から、民族間に善意と友愛の尊さを教え、その間接的效果として民族間の感情的不信感から発生した悲惨な戦争発生の防止に大いに役立つということでした。それからいま一つは前にものべたように、この《国際奉仕》はロータリー・クラブ活動の基本原則であるクラブの地域限界の外で効果が発生するという点で、他の奉仕活動とは異なるという点です。

これらの点を理論的に解決するためには二回にわたってロータリーの綱領が改正されております。一つは一九一九年のソート・レーク・シティの国際大会において《国際奉仕》は正式にロータリーの独立した奉仕の分野として明文を以て認められ、ついで一九二二年のエジンバラ大会において、国際奉仕の条項に《世界平和》に資する旨の文言が現われたのです。このような《国際奉仕》の分野の発展とともに忘れてはならないのは一九一七年のカンサス・シティ大会で時の国際ロータリー会長アーチ・C・クランプの提唱による《教育および慈善を目的とする基金の創設》です。これは当初はあまり

全世界のロータリアンの好感を以て迎えられませんでしたが、一九四七年一月二十七日にロータリーの始祖ポール・ハリスが死去するや、全世界のロータリアンはこれを契機として何か画期的な奉仕活動を行なおうということになり、その目標を一九三一年以来《ロータリー財団》と名が改められていたこの基金においたのです。

かくして全世界のロータリアンの浄財を集めて《ロータリー財団》は世界中の大学生や大学院学生や研究グループに対してその海外留学についての学資を支出するようになり、ロータリーの国際文化交流助成への積極的な姿勢が確立されることになりました。

このようにしてロータリーの《国際奉仕》は戦時中の活動から出発して、平和時における国際理解助長のための活動に移って行ったと言ってもよいでしょう。そして、大学生以上を対象として行なわれる《ロータリー財団》の活動の他に一高校生のような比較的若年層ではあるが、人生に対して最も感受性の強い時期の若者の相互交換を地区ガバナーを媒介として各クラブ間で奨励しているのも、動機は全く同じところにあると言えます。言語・風俗・文化・宗教の相違にもかかわらず人間の心の中には善意が流れていること、および、この限られた地球上に、それらの多様な要因にもかかわらず互に何等かの因縁によって結びつけられているという認識はロータリーの《国際奉仕》の実践とともに高まるばかりでした。

第二次世界大戦が終了した時は原子力の開発による人類破滅の道は異常なほどまでに有識者の危機感をそそりました。国際ロータリーが『平和への七つの道』を刊行し、ロータリーの説く奉仕理念の追求は各ロータリアンの職業倫理や人格形成のみにとどまるだけでなく各ロータリアンとその国家社会や国際社会との関係についても適用できるものであることを説いたのも決してこの危機感と無関係ではありませんでした。

しかし、第三次大戦の危機よりもっと恐ろしい問題が実は世界中の先進国と後進国との間の貧富の差から生ずるということが判明したのです。貧しい国々における人間の無自覚と無気力と驚くべき

ほどの人口増加はやがて富める国の経済的繁栄に対する脅威となって現われることが確実となりました。そして一九六一年のR・I会長ラリーは「世界が狭くなりつつある今日地球上のどこかに不幸な人がいる限り、われわれは幸せになれない」旨強調しました。

このような動きが一九六七年に結実し、国際ロータリーの仲介の下に、先進国のロータリアンが後進国を訪れ政治性の全くない助力を与えようとしたり、また要請のあった援助と物資を供与するという奉仕活動が生まれました。これを技術的に《世界社会奉仕》World community serviceと呼んではいますが、こういう特殊概念を作り出すことに一忌味があるかどうかは別として、この種の国際奉仕の実践活動が、出発点となって、世上しばしば自明の理とされているところの、勤勉と正直には幸福の報酬があり、怠惰と歪直には貧困と不幸の軋いがあるとされる自己中心的な考え方だけでは全人類の幸福は実現できないのだとする自覚の生れつつあることはロータリアンの誇りとして良いでしょう。この自覚があればこそわれわれロータリアンは自国の繁栄と幸福だけに満足することなく、他国の貧困と不幸の立場に立つてその現状たる厳しい土壌に対して慈雨の如き塑言を与えることができるのです。このロータリーの理念は未だ達成されてはおりません。しかし一歩一歩の前進は現になされつつあるのです。

第十四章 ロータリーとは

今まで十三回にわたって、ロータリー運動をいろいろな側面から分析し、その意味するところを解説して参りました。そこでここでは結びとして、ロータリーとは一体何なのかという最も中心的課題に対してメスをあてておくことにしましょう。

ロータリーを理解しようとする場合一番難しい作業は、ロータリーがクラブ奉仕という団体的作業と奉仕の実践という個人的作業の二つを循環的に要求するという点です。しかも、クラブ奉仕の内容とはクラブ会員が《例会》と呼ばれる毎週の定例会合に出席することから始まり、そこでは同僚ロータリアンとの間に親睦という心の交わりをすることが要求されていることです。親睦が一人では達成できない精神の世界であることは言うまでもありません。何人かの人達と相和してこそ親睦なのです。

しかしながら、ロータリーはクラブ会員同志の親睦だけに終始してはロータリーとはならないと説きます。ロータリーの会合で得た境地を必ずクラブ以外の各自の職場・家庭生活・社会生活で実践すべきことを説くのです。この奉仕の実践は、あくまで、ロータリアン個人として行うことが期待されています。ロータリーは決して対社会的に徒党を組みません。それは偉大なロータリーの指導者故今田恵パスト・ガバナーの説かれたように、一人一人の自由人の行動なのです。

それから、もう一つ忘れてはならないことは、一人一人の自主的判断で一週間の奉仕の実践生活をおくった各ロータリアンは次の例会において再びお互いの心と心をふれ合い、互の喜びと互の悩みとを交換しあい励まし合わなければならぬのです。職業奉仕にせよ社会奉仕にせよ国際奉仕にせよ、必ずクラブ奉仕の世界を往復しなければロータリーは無限の発展をとげることができないのです。

最近ロータリーの職業奉仕を余りも強調する余り、あるロータリアンが例会出席に夢中の間に自分の職業が傾いた事例を用いて職業奉仕と例会出席とを分離して考えようとする指導者があります。この事例のロータリアンの例会出席はただ出席するだけでロータリアン同志が互に心を通わせ、企業上その他万般の喜びと苦しみをお互いに相談し合えるようなもの、つまりロータリーのクラブ奉仕といえるものであったかどうか疑わしいものであることは残念なことなのですが、この事例が例会出席よりは各自の職業奉仕の方が重要だという印象を与えるのは大変困ったことだと思います。はっきり申しておきましょう。もしロータリアンが例会出席に熱中した結果自分の職業が左前になったら、それはそのクラブにクラブ奉仕が存在せず、したがって、それはロータリー不在のクラブであると言って

さしつかえありません。すでにロータリー不在のクラブです。その中に一人や二人職業が栄えている人がいてもそれはその人個人の職業奉仕とは言えても《ロータリーの職業奉仕》などと言えるものではありません。

ロータリーはこのようにして自分一個の成功、不成功の反省を自分の同僚ロータリアンと共に分とうということなのであって、成功ならその喜びを、不成功ならその戒めを共に啓発し合うことによつて企業経営者や専門職業人の心に絶えず柔軟性と弾力性とを与え変転極りない人生に指導者に必要不可欠な先見力を授けようとするものなのだという重要な要素を理解することができます。このようにしてロータリーの一重要な要素は《職業奉仕》よりも《クラブ奉仕》だといつても過言ではありません。ロータリーとは、このような立場からすれば、自分の認識の鏡に自分以外の人の姿を写し、それとの対比において自分の人格形成をはかるうとする生活態度だと言えましょう。そしてこのような生活態度は何もロータリーのみに限られたものではないのです。世の偉大な人は必ずこのような反省を信条とするものなのです。ただロータリーがこれらの一般の人と異なるところは、やはり《一職種一会員制》であると言えましょう。地域社会に存在するあらゆる職業人の中から一つの職種につきたった一人を選び、その個々の職業人の独自の職業経験をふまえた職業観を互に例会で接触させようというのです。どの会員も職業経験が異なるという点こそロータリーの独自性を示すものなのです。この点からすれば、今日、職業分類の原則をまげて会員をとっているクラブが多いのはロータリー運動の効果から考えてまことに遺憾なことと思います。

最後にロータリーが個人倫理を説くところからロータリーの全奉仕部門に通ずる共通要素として《善意》乃至《心の暖かさ》を抽出し、これを以てロータリーの本体だと説く指導者がおります。ロータリーの中心に《善意》があることは疑いありません。しかしここでも《善意》とは一体何なのかという反省をしないと困った問題が起ります。多くのクラブ生活や奉仕の実践を通じて発生する問題は《善意》が否定されたというよりは《善意》と《善意》とが噛み合わないことから生ずるのです。

このような場合一体どちらの《善意》が本当の善意なのでしょう。それからまた「君の商法は間違っている」と直言することが《善意》なのでしょう。それとも間違っていると思いつつあえて言わないのが《善意》なのでしょう。《善意》一つをとってみても事柄を深く見つめようとすれ中々不明なことが多いものです。この点で一つだけはっきりしていることはすべての状況を自己の反省材料として考える《善意》が本当の《善意》なのだということを述べて私の雑薄な断章をとずることに致しますよう。

付録

ロータリー・クラブ綱領

ロータリーの綱領は有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成するにある

- 第1 奉仕の機会として知り合いを拓めること
- 第2 実業及び専門職業の道徳的水準を高めること、あらゆる有用な職業は尊重されるべきであると云う認識を深めること、そしてロータリアン各自が職業を通じて社会に奉仕するためにその職業を品位あらしめること。
- 第3 ロータリアンすべてがその個人生活、職業生活及び社会生活に常に奉仕の理想を適用すること。
- 第4 奉仕の理想に結ばれた実業人と専門職業人の世界的親交によって国際間の理解と親善と平和を推進すること。

全職業人を対象とするロータリー倫理訓

この職業倫理基準は、われわれに共通な人間性を求める心をその骨子とするものである。自分の取引、自分の野心及び自分をめぐる諸関係は、常に、社会の一員としての自分の最高の義務を考慮に入れてのことでなければならぬ。職業生活のすべての地位において、自分の当面するすべての責任において、自分の主たる思考は、かかる責任を果し、かつかかる義務を履行し、かくして、その各々の任務を完了したとき、自分は人間の理想と業績とを、当初よりも幾分向上させなければならぬ。この見地から、本委員会議決によれば、国際ロータリーの商業倫理訓の基本は次に掲げる原則となるものである。すなわち、

- 1、自分の職業に価値を認め、これにより自分は社会に奉仕すべき好箇の機会を与えられたものと考えべきこと。
- 2、自分の身を修め、自分の実力を養ひ、自分の奉仕を広めるべきこと、ならびに享を通じて奉仕に徹する者に最大の利益ありとするロータリーの基本原則を實踐すべきこと。
- 3、自分は企業経営者であり、したがって成功の野心を抱いていることを自覚すべきこと。だが、自分は道徳を重んずる人間であり、最高の正義と道徳に基づかざる成功はこれを欲するものではないことを自覚すべきこと。
- 4、自分の商品、自分の労働、自分のアイデアを金銭と交換することは、全当事者がこれによって利益を受ける限りにおいてのみ、適法にして道徳にかなうものであるとの信念をもつべきこと。
- 5、自分の従事する職業の水準を向上させるため最大の努力をほらい、かくして、自分の業務の処理の仕方は賢明であって、利益を産み、この実例にならえば幸福の道が開けることを同業者者に知らしむべきこと。

- 6、同業者と同等ないしそれに優る完全なサーヴィスを尽くすような方法をもって企業経営を行なうべきこと。また、もし完全なサーヴィスか否かに疑念の生ずる場合には、当該債務上受当な範囲を越えてまでもサーヴィスを行なうべきこと。
- 7、専門職業にたずさわる者又は企業経営者の最大の資産の一つはその友人であることを理解すべきこと。また友情に基づいて手に入れたものこそまさに倫理的かつ正当なものであることを理解すべきこと。
- 8、真の友人は互に何も要求するものではなく、利益のためにみだりに友人の信頼を利用することはロータリーの精神と相容れないばかりかその倫理訓にもとるものと考えべきこと。
- 9、社会秩序の立場から他人が絶対に認められないような不正な方法によって百機会を利用し、これによつて得た人の成功を正当又は倫理的なものと考へてばならないこと。また、物質的成功を得るがため、人が倫理的に問題ありとしてしりぞけるような機会に乗ずるが如きことをしてはならないこと。
- 10、自分は一般人に対して義務を負う以上に同僚たるロータリアンに対して義務を負うものではない。ただしロータリーの真髄は競争ではなくして協力であるからであり、また党派心はロータリーの如き制度においてはあつてはならず、かつ人権はロータリーの内部に限られるものではなく、その範囲とその重要性において人類そのものの存在と同程度のものであることをロータリアンは主張するものだからであり、かつまた、ロータリーはこの高邁な理想に向つてすべての制度に属するすべての者を教化するために存在するものである。
- 11、最後に「すべて人にしてもらいたいと欲することを人に対して行なうべし」という黄金律の普遍性を信じ、われわれは、地上の天然資源がすべての者に均等な機会として与えられてこそ、人類社会は最良の状態となるべきことを主張してやまないものである。

ロータリーに関する十四の断章
一九七四年二月十日再版
著者 松井 幸雄
発行所 東京千種会
印刷所 (株)御幸印刷